台大日本語文研究第 41 期
2021 年 06 月，頁 41-63
2021-03-30 收稿，2021-06-01 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202106_(41).0003

日語名詞並列詞組中之「と」重複形的句法特徵探討

徐佩伶*
菊島和紀†

摘要

本論文以語意及句法的觀點分析日語中「と」名詞並列詞組的結構，並探討並列連詞「と」重複形的句法特徵。「と」重複形在益岡・田窪（2006），Fukui and Sakai （2003）， Vermeulen （2008）等文獻中認為為單純的複製，在句法上不具有實質的功能。對此 Asada（2014）則主張該重複的「と」為焦點標誌，透過焦點的語意來解釋句子的文法性。本文先從「と」名詞並列詞組在句子中所觀察到歧義性出發討論該歧義與範域解釋（Scope） 的關聯性，同時主張不同的範域解釋是透過句法操作而衍生出來。再者，本文亦透過ガ・ノ交替、分裂句，片段語答句，名詞省略等句法現象討論「と」重複形在句中所扮演的角色，並統一說明「と」重複形的句法特徵。

關鍵詞：並列連詞「と」重複形、名詞並列句、範距、位移

* 淡江大學日本語文學系副教授
† 淡江大學日本語文學系助理教授

臺灣人文學術期刊資料庫

A Study on the NP Coordinated Structure and Repetitive Coordinator "*TO*"

HSU,Pei-Ling*
KIKUSHIMA,Kazunori†

Abstract

This study focuses on NP coordinated structures headed by *To* in Japanese and attempts to clarify the syntactic characteristics of the repetitive coordinator '*To*' (simply called RC-*To*). RC-*To* has been considered as a phonologically optional element in most literatures (Fukui and Sakai 2003, Masuoka and Takubo 2006, Vermeulen 2008). However, Aasada (2014) analyzes it as a focus particle implicating exhaustive specification. In this study, we start with ambiguous sentences and show that the ambiguity can be captured by scope, which is related to syntactic structure. RC-*To* seems to play a significant role in terms of syntactic movement in Ga/No conversion, (pseudo-)cleft constructions, fragment answers and NP ellipsis, and hence should be given a unified account.

Key words: Repetitive Coordinator "TO", NP coordinated Structure, Scope, Syntactic Movement

* Associate Professor, Department of Japanese, Tamkang University
† Assistant Professor, Department of Japanese, Tamkang University

臺灣人文與藝術期刊資料庫

「と」名詞句等位節における「と」の重複形の統語的特徴

徐佩伶*
菊島和紀†

要旨

本稿では、日本語の「と」名詞句等位節を対象に、「と」の重複形の統語的特徴を考察する。先行研究においては、最後の等位項（名詞 2）の後の「と」が音韻的重複、随意的要素であると考えられてきたが（Fukui and Sakai 2003、益岡・田窪 2006、Vermeulen 2008）、Asada（2014）は、その音韻的重複の「と」が随意的要素ではなく、「焦点化詞」として機能すると主張している。本稿は、Asada（2014）を支持し、「NP1 と NP2（と）」に見られる解釈の相違を作用域の観点から議論し、ガ・ノ交替の現象をはじめ、（疑似）分裂文、フラグメント応答文、そして名詞句省略の現象を用いて「と」の重複形が統語操作に関与することを示す。

キーワード：「と」重複形、名詞句等位節、スコープ、移動

* 淡江大學日本語文學系副教授
† 淡江大學日本語文學系助理教授

臺灣人文學術期刊資料庫

「と」名詞句等位節における「と」の重複形の統語的特徴

徐佩伶
菊島和紀

一、はじめに

本稿では、日本語の「と」名詞句等位節を対象に、「と」の重複形の有無による「と」名詞句等位節の相違を考察し、ガ・ノ交替の現象をはじめ、(疑似)分裂文、フラグメント応答文、名詞句省略といった現象の検討を通して、「と」の重複形が統語操作ー移動の有無に関与することを議論する。

「と」によって等位接続される句は等位項と呼ばれ、最後の等位項の後に「と」が付くか付かないかで二通りの形式が見られる。(1a)に示すのは、「と」がNP1(名詞1)、NP2(名詞2)といった二つの等位項を連結する形式であり、(1b)に示すのは、「と」がNP2の後に重複されている形式である。

(1) a. NP1 と NP2
b. NP1 と NP2 と

この重複される「と」に関して、(2)(3)に示す例のように、「衝突する」という述語は二通りの形式を項に取ることができ、音声的に随意的なものであると考えられることが多い(益岡・田窪 2006,Fukui and Sakai 2003, Vermeulen 2008)。

(2) 世紀末にグローバリズムとナショナリズムが衝突するだろうことの本当の姿は、ここにこそ現れる。(目森一喜 1996『日本見世物世紀末』)
(3) 意識と現実とが衝突して一つのアマルガムを作り出す、といってもよい。(秋山駿 2003『神経と夢』)

臺灣大學學術期刊資料庫

一方、Asada（2014）では、日本語の等位接続詞「と」の重複形（RC-と）は焦点化する機能をもち、焦点化辞であると主張している。その主張を裏付ける一つの事実として、「RC-と」は連体節の中の「ガ・ノ交替」を妨げるという事実がある。（4）では主格主語の「太郎と次郎が」が属格主語の「太郎と次郎の」になるように、ガ・ノ交替が起こるが、「と」の重複形が現れる（5）の例では、ガ・ノ交替が起こらず、属格主語の「太郎と次郎との」は許されない。

（4）[太郎と次郎　が/の　飲んだ]ワイン

（Asada2014：99（3））

（5）[太郎と次郎と　が/*の　飲んだ]ワイン

（Asada2014：99（4））

本稿では、まず（1）に示した「と」名詞句等位節の両形式が同じ述語と共起しても解釈が異なることがあるという事実を提示し、それが作用域（スコープ）の観点から記述できることを示す。次に、作用域による多義性の欠如とガ・ノ交替の阻止には「と」の重複形の生起が関与していることを明らかにし、「と」の重複形は統語操作に影響を与えることを論じる。

二、基本事実

この節では、「と」の重複形の有無によって「と」名詞句等位節が同じ述語と共起しても解釈が異なるという事実を見ていく。（6）では、「と」名詞句等位節「A 社と B 社（と）」が主語位置に生起し、「交渉する」のような複数動作主を要請する述語と共起する。「A 社と B 社」は（6a）において解釈が二通りあり、文が多義的である。

臺灣大學學術期刊資料庫

（6）a.A 社と B 社が著作権侵害疑惑について交渉した。
i.A 社が B 社と、B 社が A 社と交渉した。（相互）
ii.A 社も B 社も、それぞれ別の会社と交渉した。（分配）
b.A 社と B 社とが著作権侵害疑惑について交渉した。
i.A 社が B 社と、B 社が A 社と交渉した。（相互）
ii.*A 社も B 社も、それぞれ別の会社と交渉した。（*分配）

（6a）では、「A 社と B 社がお互いに著作権侵害疑惑について交渉した」という「相互読み」があり、「A 社も B 社もそれぞれ著作権侵害疑惑で別の会社と交渉した」という「分配読み」がある。一方、（6b）における「A 社と B 社と」の場合では、「A 社と B 社がお互いに著作権侵害疑惑について交渉した」という「相互読み」はできるが、「別々にほかの会社と交渉した」という「分配読み」はできない。ほかに「結婚する」「衝突する」のような複数動作主を求める述語についても同じことが言える。具体例を（7）（8）に示す。

（7）a.太郎とめぐみが結婚した。
i.太郎とめぐみは結婚して夫婦となった。（相互）
ii.太郎とめぐみはそれぞれ結婚した。（分配）
b.太郎とめぐみとが結婚した。
i.太郎とめぐみは結婚して夫婦となった。（相互）
ii.*太郎とめぐみはそれぞれ結婚した。（*分配）

（8）a. ワゴン車と軽乗用車が衝突した。
i.ワゴン車と軽乗用車がお互いに衝突した。（相互）
ii.ワゴン車と軽乗用車がそれぞれ別の車に衝突した。（分配）
b.ワゴン車と軽乗用車とが衝突した。
i.ワゴン車と軽乗用車がお互いに衝突した。（相互）
ii.*ワゴン車と軽乗用車がそれぞれ別の車に衝突した。（*分配）

臺灣大學學術期刊資料庫

このような文の多義性は、一般の動作動詞と共起する文にも観察される。具体例を（9）（10）に示す。（9）は「と」名詞句等位節が主語位置（ガ格を取る）にある例であり、（10）は「と」名詞句等位節が目的語位置（ヲ格を取る）にある例である。

（9）a. 太郎と次郎が大きい箱を運んできた。
i.二人で大きい箱を運んできた。（集団）
ii.太郎も次郎もそれぞれ大きい箱を運んできた。（分配）
b.太郎と次郎とが大きい箱を運んできた。
i.二人で大きい箱を運んできた。（集団）
ii.*太郎も次郎もそれぞれ大きい箱を運んできた。（*分配）

（10）a.先生が太郎と次郎を呼び出した。
i.先生が太郎、次郎を一緒に呼び出した。（集団）
ii.先生が太郎と次郎を別々に呼び出した。（分配）
b. 先生が太郎と次郎とを呼び出した。
i.先生が太郎、次郎を一緒に呼び出した。（集団）
ii.??先生が太郎と次郎を別々に呼び出した。（??分配）

（9a）に示す例では、一般の動作動詞「運ぶ」が共起し、主語が「太郎と次郎」の場合、解釈が二通りある。「太郎と次郎が二人で大きい箱を運ぶ」という集団読み（9a-i）と、「太郎も次郎もそれぞれ大きい箱を運ぶ」という「分配読み」（9a-ii）である。しかし、そのような多義性は主語が「太郎と次郎と」となると消えてしまう。（9b）に示したように、「太郎と次郎が二人で大きい箱を運ぶ」という集団読みはできるが、「それぞれ大きい箱を運ぶ」という「分配読み」は容認されない。

同様に、（10a）における「太郎と次郎」の場合では、「一緒に先生に呼び出された」という集団読み（10a-i）と、「別々に先生に呼び出された」という分配読み（10a-ii）がある。他方、（10b）における「太

臺灣大學學術期刊資料庫

郎と次郎と」では、「一緒に先生に呼び出された」という集団読みはできるが、「別々に先生に呼び出された」という読みになると、容認度が下がる。

以上に挙げられた述語において、「NP1 と NP2」を含む文は多義的で、「NP1 と NP2 と」を含む文は多義的ではないという事実から、前者が「分配読み」を許し、後者が「分配読み」を欠くという点に着目すべきである。この事実を（11）のように記述することができる。

（11）「と」名詞句等位節は主語位置と目的語位置にある場合、
　　（a）分配読みが可能であるが、
　　（b）「と」の重複形を付けると、分配読みが容認できない、もしくはその容認度が下がる。

なお、解釈のみならず、「と」の重複形の有無によって「と」名詞句等位節が連体節の主名詞になるかならないかという相違も見られる。（12b）と（13b）が示すように、「と」の重複形を付ける「と」名詞句等位節が連体節の主名詞になると、非文となる。

（12）a.［e 大きい箱を運んできた］太郎と次郎はどこかへ行った。
　　b.*［e 大きい箱を運んできた］太郎と次郎とはどこかへ行った。

（13）a.［先生が e 呼び出した］太郎と次郎はどこかへ行った。
　　b.*［先生が e 呼び出した］太郎と次郎とはどこかへ行った。

これらの事実は、「と」の重複形が「と」名詞句等位節の意味解釈及び文の文法性に関わっていることを示唆している。さらに、連体節の主名詞にならないという事実と分配解釈の欠如との事実の間に共通した統語的特徴があると考え、以下その統語的特徴について解釈の側面から議論していく。

臺灣大學學術期刊資料庫

三、スコープ解釈

（一）分配読み

この節では、まず日本語における数量詞作用域（スコープ）の多義性を表す例を紹介する（14)。その解釈を（15）に示す。

（14）二年生だけ Aspects を読むことを要求する。

（外池 2019:144（8a））

（15）a. だけ>要求する

（Aspects を読むことを要求するのは二年生に対してのみである。二年生以外の人が読むかどうか対象としない）

b. 要求する>だけ

（二年生以外だれも Aspects を読まないことを我々は要求する）

（14）に示した例は「二年生だけ」と「要求する」という二つの要素が共起し、解釈が二通りある。（15a）では、「Aspects を読むことを要求するのは二年生に対してのみである」という意味で、二年生以外の人が読むかどうか対象としない。一方、（15b）では「二年生以外誰も Aspects を読まないことを我々は要求する」ことが含意されている。前者は二年生に対して出された要求であり、後者はその要求は二年生に限定するということである。この多義性は「だけ」が取るスコープと「要求する」が取るスコープの間で生じたものである。（15a）は「だけ>要求する」、すなわち、「二年生だけ」が「要求する」より広いスコープを取り、（15b）は「要求する>だけ」という「二年生だけ」が「要求する」より狭いスコープを取る。

このようなスコープ解釈の観点を用いて（10a）に示された文の多義性を捉えることができる。

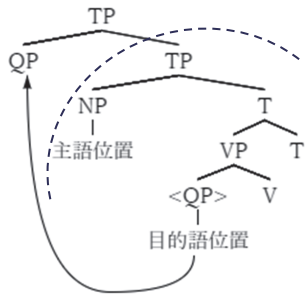
臺灣大學學術期刊資料庫

（10）a. 先生が太郎と次郎を呼び出した。
　　i. 先生が太郎、次郎を一緒に呼び出した。　（集団）
　　ii. 先生が太郎と次郎を別々に呼び出した。　（分配）

（10a-i）は、「太郎と次郎」が目的語位置に生起し、「呼び出した」より狭いスコープを取ることで、「先生が呼び出した」という一つの出来事の中に「太郎と次郎が入っている」という意味になる（集団読み）。それに対する（10a-ii）では、「太郎と次郎」が目的語位置にありながら、「先生が呼び出した」より広いスコープを取り、「先生が太郎を呼び出した」ことと「先生が次郎を呼び出した」ことが別々に起こり、「分配読み」となる。つまり、「と」名詞句等位節の「太郎と次郎」が動詞句（VP）内の目的語位置にありながら、動詞句の外で解釈されうるということが分かる。

そこで、Haim and Kratzer （1998：185）に従い、数量詞（QP）が意味解釈において VP から抜き出され、S（=TP）に付加すると仮定する。TP に付加する数量詞 QP が TP の指定部（主語位置）と動詞句 VP を C 統御しているため、主語と動詞句より広い作用域を持ち、分配解釈が得られる。構造を示すと（16）のようになる。

（16） 数量詞繰り上げ



QP のスコープは TP が支配する範囲すべてである（点線以下の部分）。

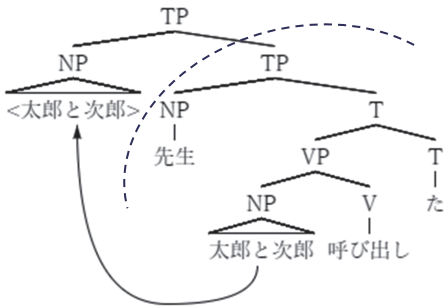
例を挙げると、「Someone loves everyone」という文は多義的であり、「ある特定の人は全ての人を愛する」という解釈と「全ての人は、誰かに愛されている（誰かは不特定である）」という解釈がある。後

臺灣大學學術期刊資料庫

者の解釈は、目的語位置にある「everyone」が数量詞繰り上げによりsomeone より高い位置に（TP に付加する位置に）移動し、someone より広いスコープを取ることで得られるものだと分析される。

このように、「分配解釈」は構造に関係するものであるとすると、（10a）における目的語の「太郎と次郎」は潜在的移動（音声を伴わない移動）で主語を越え、高い位置に移動していると分析できよう。（10a-ii）の構造を（17）に示すことができる。

（17）（10a-ii）の構造（太郎と次郎＞VP 動詞句：分配読み）



「太郎と次郎」は TP より広いスコープを取る。

（17）では、「NP1 と NP2」が TP の付加位置に移動し、そこで TP より広いスコープを取り、「太郎に対して、先生が呼び出した」「次郎に対して、先生が呼び出した」という二つの出来事がそれぞれ起こるという解釈（分配解釈）が可能になる。

（二）集団読みと相互読み

分配読みは「と」名詞句等位節が広いスコープをとることで得られる解釈であるとすれば、（10a-i）における「集団読み」は、目的語位置にある「と」名詞句等位節が繰り上げをせずに、動詞句より狭いスコープを取ることで生じられる解釈であると分析できる。

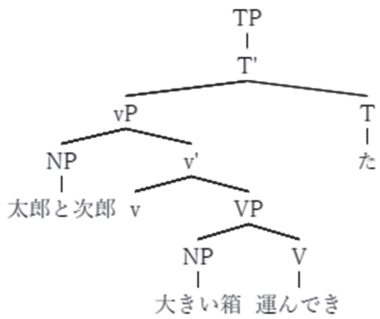
一方、「NP1 と NP2」が主語位置にある場合、集団読みがどのように派生されたのか。（9a）の例を以下に再掲する。

臺灣大學學術期刊資料庫

（9）a. 太郎と次郎が大きい箱を運んできた。
　　i. 二人で大きい箱を運んできた。　（集団）
　　ii. 太郎も次郎もそれぞれ大きい箱を運んできた。　（分配）

ここでは、動詞句内主語仮説を仮定し、「太郎と次郎」は「運んできた」の動作主として、*v*P の指定部の位置に基底生成するとする。

（18）（9a）の基底構造



（18）に示したのは（9a）の基底構造である。この構造では「太郎と次郎」は動詞句内の θ 位置で解釈され、*v*P より狭いスコープを取り、「集団読み」が得られるのである。

最後に「相互読み」に関しては、相互動作を表す述語の語彙特性（[+Reciprocal]）によって生まれた解釈であり、相互動作を表す述語（Reciprocals）が共起する場合、複数の動作主が RecipVP の指定部に基底生成し、VP 内で解釈される（Bruening 2006）。つまり、「相互読み」は「集団読み」と同様に、複数の動作主が θ 位置で解釈されると考える。その主張を裏付ける事実を（19）に示す。

（19）a. ワゴン車と軽乗用車がトラックに衝突した。
　　i. ワゴン車と軽乗用車がそれぞれあるトラックと衝突した。
　　ii. ワゴン車と軽乗用車が一台のトラックと衝突した。

臺灣大學學術期刊資料庫

b. ?ワゴン車と軽乗用車とがトラックに衝突した。
i. *ワゴン車と軽乗用車がそれぞれあるトラックと衝突した。
ii. ワゴン車と軽乗用車が一台のトラックと衝突した。

（19）では「衝突する」とその動作を行う「動作主」、動作を受ける「対象」を表す句「トラックに」が文に現れる例である。この場合、動作を受ける対象「トラックに」があると、「ワゴン車が軽乗用車と衝突する」という「相互読み」ができない。つまり、「相互読み」は「対象」を表す項が現れない場合にしか生じない解釈であり、「対象」を表す項が生起すると、複数動作主による相互動作ができなくなり、その代わりに「集団読み」になる。

したがって、「相互読み」は相互動作を表す述語の語彙特性によるものであり、「集団読み」と同様にθ位置で解釈され、「分配読み」のように派生によってできた解釈ではないということである。

四、ガ・ノ交替

以上「NP1 と NP2」の解釈について論じたが、本節では「と」の重複形を付けると「分配読み」ができない、もしくはその容認度が下がるという事実に対して説明を試みたい。

「NP1 と NP2」に見られる「分配読み」が（20a）に示す分析のように、広いスコープを取ることで得られる解釈であるとすれば、「分配読み」を欠いている「NP1 と NP2 と」に対しては、（20b）に示すように考えてみたい。

（20） a.「NP1 と NP2」は繰り上げの操作により、広いスコープを取る位置（TP の付加位置）へ移動し、分配解釈が得られる。
b.「NP1 と NP2 と」は繰り上げの操作により広いスコープを取る位置（TP の付加位置）へ移動しない。よって、分配解釈が得られない。

臺灣大學學術期刊資料庫

分配解釈が可能であるかどうかが移動の有無に関与するのであれば、「と」の重複形の存在が「と」名詞句等位節の移動の可否に関わることになる。実際に、「と」の重複形が付くと、「と」名詞句等位節の移動を妨げると考えられる事実がある。その一つは、2 節で挙げられた（12）と（13）のような、「と」の重複形を付ける「と」名詞句等位節が連体節の主名詞にならないという例でる。具体例を以下に再掲する（12a）（13a）では、項である名詞句「太郎と次郎」が節から抜き出され、連体節の主名詞（連体節によって修飾された主要部の名詞句）になるが、（12b）（13b）では、「太郎と次郎と」に同様な操作が課されると、結果的に文が非文となる。

（12）a. [e 大きい箱を運んできた]太郎と次郎はどこかへ行った。
b.*[e 大きい箱を運んできた]太郎と次郎とはどこかへ行った。

（13）a. [先生が e 呼び出した]太郎と次郎はどこかへ行った。
b.*[先生が e 呼び出した]太郎と次郎とはどこかへ行った。

また、「ガ・ノ交替」の可否も「と」名詞句等位節の移動があるか否かに関わっている。（4）では「太郎と次郎」がガ・ノ交替を引き起こすが、「と」の重複形が付く「太郎と次郎と」の場合は、（5）が示すように、ガ・ノ交替を引き起こさない。

（4）[太郎と次郎　が/の　飲んだ]ワイン
（Asada2014：99（3））

（5）[太郎と次郎と　が/*の　飲んだ]ワイン
（Asada2014：99（4））

Asada（2014）では、重複形の「と」（「RC-と」）が焦点化辞であり「ガ・

臺灣大學學術期刊資料庫

ノ交替」を阻止するという事実を指摘しているが、なぜ焦点化辞の「RC-と」が「ガ・ノ交替」を阻止するのかという問題に関して言及されていない。以下では、「と」名詞句等位節の移動が「ガ・ノ交替」に関与することを論じていく。

まず、(21) に示す「ガ・ノ交替」の例に観察されたスコープ解釈の相違から見てみよう。(21a) では、主格主語「ルビーか真珠が」が Gapless の連体節の中で主名詞「可能性」より狭いスコープを取る解釈しかないが、(21b) では、属格主語「ルビーか真珠の」は主名詞「可能性」より狭いスコープも広いスコープも取ることが可能である。

(21) a. [[ルビーか真珠]**が**安くなる]可能性が 50%以上だ。
i. (可能性＞ルビーか真珠)
ルビー或いは真珠が安くなるという可能性が 50%以上だ。
ii. (*ルビーか真珠＞可能性)
*ルビーが安くなる可能性、或いは真珠が安くなる可能性が 50%以上だ。
b. [[ルビーか真珠]**の**安くなる]可能性が 50%以上だ。
i. (可能性＞ルビーか真珠)
ii. (ルビーか真珠＞可能性) (Miyagawa1993)

Miyagawa (1993) は (21) の事実に対して、「ガ・ノ交替」において、属格主語が DP の指定部へ潜在的移動を行うと主張する。Ochi(2001) は属格主語が gapless の連体節から顕在的移動を行うことがあると指摘し、さらに gap を含む関係節に関する考察から、属格主語は関係節からも潜在的移動を経て DP の指定部に位置すると主張する。構造で示すと (22b) のようになる。

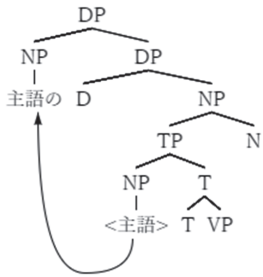
臺灣大學學術期刊資料庫

（22）ガ・ノ交替

a.主格主語の位置



b.属格主語の位置



それでは、「と」名詞句等位節が Gapless の連体節と関係節の主語位置に生起する例を見てみよう。具体例をそれぞれ（23）と（24）に示す。(23c,d)（24c,d)のどちらも「NP1 と NP2 と」が主格主語になるが、属格主語にはならない。すなわち、Asada（2014）が指摘したように、「RC-と」が「ガ・ノ交替」を阻止するという事実と一致している。また、(23b）と（24b）が示すように、属格主語が主名詞より広いスコープを取る解釈が可能になっている。

（23）Gapless 連体節

a. [容疑者 X と容疑者 Y が あそこの金庫を運び出した]事件

i. （事件＞容疑者 X と容疑者 Y）

ある事件では、容疑者 X と容疑者 Y が一緒に金庫を運び出した。

ii.（*容疑者 X と容疑者 Y＞事件）

*容疑者 X が金庫を運び出した事件があり、容疑者 Y が金庫を運び出した事件がある。

b. [容疑者 X と容疑者 Y の あそこの金庫を運び出した]事件

i. （事件＞容疑者 X と容疑者 Y）

ii.（容疑者 X と容疑者 Y＞事件）

臺灣大學學術期刊資料庫

c. [容疑者 X と容疑者 Y とが あそこの金庫を運び出した]事件
i. （事件＞容疑者 X と容疑者 Y）
ii. （*容疑者 X と容疑者 Y＞事件）
d. *[容疑者 X と容疑者 Y とのあそこの金庫を運び出した]事件

（24）関係節（relative clause）
a. [太郎と次郎が t_1 飲んだ] ワイン $_1$
i. （ワイン＞太郎と次郎）
あるワインに対して、太郎も次郎も飲んだ。
ii. （*太郎と次郎＞ワイン）
*太郎が飲んだワインがあり、次郎が飲んだワインがある。
b. [太郎と次郎 $_2$ の [t_2 t_1 飲んだ]] ワイン $_1$
i. （ワイン＞太郎と次郎）
ii. （太郎と次郎＞ワイン）
c. [太郎と次郎とが t_1 飲んだ] ワイン $_1$
i. （ワイン＞太郎と次郎）
ii. （*太郎と次郎＞ワイン）
d. *[太郎と次郎と $_2$ の [t_2 t_1 飲んだ]] ワイン $_1$

本稿では、Miyagawa（1993）と Ochi（2003）に従い、「ガ・ノ交替」における属格主語が潜在的に（Gapless の場合にも顕在的移動が可能）DP の指定部位置に移動すると仮定する。それを踏まえ、「と」の重複形が付く「と」名詞句等位節が「ガ・ノ交替」を引き起こさないというのは、「NP1 と NP2 と」が DP の指定部位置に移動しないからだと分析できる。よって、「と」の重複形の統語的特徴を（25）のように記述することができる。

（25） 「と」の重複形（「RC-と」）は、「と」名詞句等位節（「NP1 と NP2」）の移動を妨げる。

臺灣大學學術期刊資料庫

つまり、「と」の重複形は「と」名詞句等位節を焦点化する機能を担うほか（Asada2014）、「と」名詞句等位節の移動を阻止することもあり、統語的に深く関与していることが明らかである。

五、検証

この節では、移動が関与する三つの構文－「（疑似）分裂文」、「フラグメント応答文」と「名詞句省略」を用いて、（25）に示した「と」の重複形（「RC-と」）の統語的特徴を検証する。以下、「RC-と」が付く「と」名詞句等位節（「NP1 と NP2 と」）が移動を行わないということを裏付ける事実を示しながら議論を進める。

まず、（26）に示す分裂文において、「と」名詞句等位節が述部に生起し、「太郎とめぐみ」も「太郎とめぐみと」も両方容認される。

（26）a. 昨年結婚したのは[太郎とめぐみ]だ。
　　b. 昨年結婚したのは[太郎とめぐみと]だ。

それに対して（27）に示す（疑似）分裂文では、述部が「太郎とめぐみが」の場合は容認されるが、「太郎とめぐみとが」となると容認されない（27b）。

（27）a. 昨年結婚したのは[太郎とめぐみが]だ。
　　b.*昨年結婚したのは[太郎とめぐみとが]だ。

このような容認性の違いはどのように捉えられるのか。Hoji（1990）では、分裂文に移動が関与する場合と関与しない場合があると指摘している。そこで、移動の有無を判断するにはいくつかの手段があり、その一つは「島の効果」が現れるか否かによって判断できる。つまり、島の効果が現れる場合は、何らかの移動が関与し、島の効果が現れない場合は、移動が関与しないということである。（28）（29）に示すのは「複合名詞句島」を含む例である。

臺灣人學學術期刊資料庫

（28） [[NP[s e_i pro_j 食べた]人]$_i$が病気になった]のは[この魚]$_j$だ。
（Hoji1990（Ch.5,p.31（105））

（29）*[[NP[s e_i pro_j 食べた]人]$_i$が病気になった]のは [この魚を]$_j$だ。
（Hoji1990（Ch.5,p.33（109a））

（28）における名詞句「この魚」は格助詞が伴われておらず、複合名詞句の島があっても「島の効果」が現れなく、文法的な文である。一方、（29）における「この魚を」の場合は（28）と異なり、「島の効果」が現れ、非文法的である。Hoji（1990）は、分裂文の形成において、格を伴わない裸名詞句（Bare NP）の場合は移動が関与しなく、格助詞を伴う名詞句の場合は移動が関与すると主張する。本稿はHoji（1990）に従い、格を伴う名詞句は分裂文においてθ位置からCopularの「ダ」の前の位置に移動すると仮定する。従って、移動操作が関与する（27a）の（擬似）分裂文では、「太郎とめぐみが」が移動によって派生の位置に現れると分析できる。それに対する（27b）では、「太郎とめぐみとが」が派生の位置に生起すると非文法的になることから、移動が許されないと考えられる。

次に、フラグメント応答文を見てみよう。（30a）に示すように「太郎とめぐみだ」がショートアンサーとして成り立つが、（30b）における「太郎とめぐみとだ」はショートアンサーとして成り立たない。

（30）Q：昨年結婚したのは誰ですか。
a. 太郎とみぐみだ。
b.*太郎とめぐみとだ。

フラグメント応答文では、フラグメントとなる要素がフォーカス移動で上位の機能範疇の指定部に移動し、その機能範疇より下の構造がPFで削除されるという統語操作が一般に仮定されている

臺灣人學學術期刊資料庫

（Merchant（2001,2008），根本（2014））。（30a）のショートアンサーを派生する仮定と統語操作の概略を（31）に示す。

（31）[CopP 昨年結婚したのは[太郎とめぐみ]]だ]。
① フォーカス移動
→ [FocP 太郎とめぐみ][CopP 昨年結婚したのは t だ]
② PF 削除
→ [FocP 太郎とめぐみ][~~CopP 昨年結婚したのは t だ~~]

同様に、「太郎とみぐみと」の場合となると、フォーカス移動で上位の機能範疇に移動しなければそれ以降の削除操作も行われないため、ショートアンサーを作ることができない。よって、これも「太郎とみぐみと」が移動を行わないと仮定すれば説明がつく事実である。

最後に、名詞句省略に関しては、（32a）（33a）が示すように、「NP1 と NP2 の」が修飾する名詞句（下線の部分）が省略できるが、（32b）（33b）が示すように、「NP1 と NP2 との」が修飾する名詞句は省略できない。

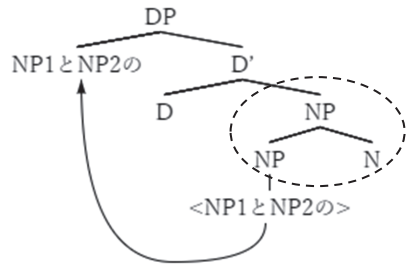
（32）a. [容疑者 X と共犯者 Y の]関係は同級生だったが、[容疑者 X と共犯者 Z の] __は不明だ。
b.*[容疑者 X と共犯者 Y との]関係は同級生だったが、[容疑者 X と共犯者 Z との] __は不明だ。

（33）a.これは[人と人の]絆であり、[人と自然の]__でもある。
b.*これは[人と人との]絆であり、[人と自然との]__でもある。

これらの文法性の違いも移動分析と削除によって捉えられる。削除は構成素が対象でなければならないため、「NP1 と NP2 の」が DP の指定部に移動し、それより下の範疇 NP が構成素であるので PF で削除される。その構造の概略を（34）に示す。

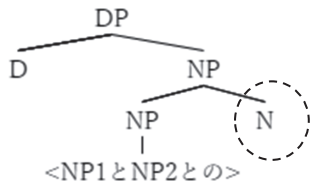
臺灣大學學術期刊資料庫

（34）NP は構成素であり、PF で削除可能。



それに対する「NP1 と NP2 との」の場合、DP の指定部に移動せず、NP の中に留まってしまうため、「NP1 と NP2 との」を除いて構成素でない N だけを削除することができないのである。その構造を（35）に示す。

（35）N は構成素ではなく、PF で削除不可能。



このように、（32a）（33a）における名詞句省略が文法的で、（32b）（33b）における名詞句省略が非文法的であることも、「と」名詞句等位節が移動しているか否かによって捉えられる。

以上、「と」の重複形（「RC-と」）の付く「と」名詞句等位節が移動を行わないと仮定すれば様々な事実が説明できることを示した。

六、まとめ

本稿では、「と」の重複形（RC-と）の有無によって見られる「と」名詞等位節の解釈の相違をスコープ関係の観点から論じた。そして、

臺灣大學學術期刊資料庫

「と」の重複形が移動操作に関与すると考えられる事実－①「と」名詞句等位節が連体節において主要部の名詞になるかどうか、②ガ・ノ交替において属格主語になるかどうか—を提示した。さらに、「(疑似) 分裂文」「フラグメント応答文」「名詞句省略」といった構文を用いて「と」名詞句等位節と移動操作との関係を検証し、「と」の重複形が付く「と」名詞句等位節が移動を行わないということを論じた。こうした議論から「と」の重複形 (「RC-と」) はただ単に随意的な要素ではなく、統語操作に影響を与えることがあると結論づけられた。

最後に、「と」の重複形 (「RC-と」) はなぜ「と」名詞句等位節の移動を阻止するかという問題に対して理論的な説明が必要となってくる。Asada (2014) では「RC-と」が排他的焦点化辞として考えられており、筆者もその主張を踏まえて「と」の重複形が [Foc]素性を持つと仮定する。[Foc]が与えられた「と」名詞句等位節は、[Foc]を持たない「と」名詞句等位節と異なり、移動先により厳しい条件が課されている。例えば、移動先において「と」が持つ[Foc]素性と合致できる素性でなければ、解釈上問題が生じ、結果的に容認不可能な文となろう。本稿は、「と」名詞句等位節の両形式の相違と「と」の重複形の統語的特徴を主に記述したものであり、上述したメカニズムの詳細に関わる議論については別稿に譲ることにしたい。

【参考文献】

Asada, Yuko.(2014)“On the Nature of the Repetitive Coordinator To in Japanese,”Gengo Kenkyu 145, 97-109

Bruening,Benjamin.(2006).“The morphosyntax and se-mantics verbal reciprocals,” Manuscripts, University of Delaware.

Fukui,Naoki & Sakai,Hiromu.(2003).“The visibility guideline for functional categories: verb raising in Japanese and related issues,” Lingua 113, 321-375

臺灣大學學術期刊資料庫

Irene Heim & Angelika Kratzer (1998) Semantics in Generative Grammar. Blackwell Publishing.

Hoji, Hajime. (1985) Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese, unpublished Doctoral dissertation, University of Washington.

Koizumi,Masatoshi. (2000).“String vacuous overt verb movement,” Journal of East Asian Linguistics 9, 227-285

Merchant, Jason. (2004) “Fragments and Ellipsis,” Lin-guistics and Philosophy 27, 661-738.

Merchant, Jason (2008) “Variable and Island Repair un-der Ellipsis,” in Kyle Johnson (ed.) Topics in Ellipsis, Cambridge University Press. 132-153.

Miyagawa,Shigeru.(1993).‘Case-Checking and Minimal Link Condition,’in Collin Phillips(ed.),MIT Working Papers in Linguistics 19, MITWPL, 213-254

Oci,Masao.(2001).“Move F and Ga/No Conversion in Jpanaese,” Journal of East Asian Linguistics 10, 271-286

Takano,Yuji.(2002).“Surprising constituents,” Jour¬nal of East Asian Linguistics 11, 243-301

Vermeulen,Reiko.(2008).“Nonconstituent Coordina¬tion in Japanese: A Case of Phonological Reorder¬ing,” Linguistic Inquiry 39, No 2, 345-354

外池滋生（2019）『ミニマリスト日英語比較統語論』開拓社

根本貴行（2014）「日英語母語獲得過程に見られるフラグメント/ショートアンサーの統語操作」『英語英文学研究』p.54-66

益岡隆志・田窪行則（2006）『基礎日本語文法-改訂版』くろしお出版

『中納言』現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）<URL: https://chunagon.ninjal.ac.jp>

臺灣大學學術期刊資料庫